

日本ジョージ・エリオット協会

第 25 回全国大会プログラム

日 時：2022 年 12 月 10 日（土）午前 10 時～午後 6 時
場 所：日本大学 法学部 神田三崎町キャンパス 10 号館 4 階
住所 〒101-8375 東京都千代田区神田三崎町 2 丁目 3 番 1 号
電話 03-5275-8501 Homepage <https://www.law.nihon-u.ac.jp/>
アクセス：水道橋駅：JR 総武線・中央線東口出口（徒歩 3～5 分） 都営三田線 A2 出口
（徒歩 3～6 分）
神保町駅：東京メトロ半蔵門線、 都営三田線・新宿線 A4 出口（徒歩 5～8 分）

会 場：1041 講堂

会 員 控 室：1042 講堂

開 催 校 委 員： 日本大学教授 佐藤 明子

受 付 開 始： 9：30～

総合司会 北九州市立大学准教授 濱 奈々恵

開会の辞・開催校代表挨拶（10：00～10：05） 日本大学教授 佐藤 明子

研究発表 10：10～11：30

司会：桜美林大学准教授 大竹麻衣子

1. 出会わない二人——『ミドルマーチ』におけるメアリとドロシアの問題——

徳島文理大学大学院 中西 温子

2. ロザモンドがリドゲイトに幸福をもたらした可能性

——シンパシーに乏しい登場人物の功績の再評価

同志社大学嘱託講師 石井 昌子

休憩・昼食 11：30～12：45

会長挨拶 12：45～12：50 京都大学教授 廣野由美子

総 会 12：50～13：35 司会：東京家政大学教授 谷田 恵司

シンポジウム 13:45～16:45

題目：「響き合う作品世界—G.エリオットと20世紀、21世紀の作家たち（V. Woolf, E. Bowen, A. S. Byatt, & A. Soueif）」

G.エリオット『ダニエル・デロンダ』とV.ウルフ『幕間』にみる「個」と「集合体」の関係

講師 神奈川大学非常勤講師 木下 未果子

E.ボウエンの後期作品（『心の死』、『エヴァ・トラウト』）における感情描写—
G.エリオットの後期作品（『ミドルマーチ』、『ダニエル・デロンダ』）との関連において

講師 東京家政大学名誉教授 伊藤 節

G.エリオット『ロモラ』とA.S.バイアット『抱擁』に見る歴史認識

司会・講師 都留文科大学名誉教授 窪田 憲子

現代エジプトにおけるG.エリオット作品の継承と書き直し—A.スウェイフの

In the Eye of the Sun を中心にして

講師 北九州市立大学准教授 濱 奈々恵

特別講演 16:55～17:55

司会： 慶應義塾大学教授 永井 容子

演題： 環境文学としてのジョージ・エリオット作品—風景、家屋、社会

講師： 慶應義塾大学教授 原田 範行

閉会の辞 17:55～18:00 日本ジョージ・エリオット協会副会長・慶應義塾大学教授
永井 容子

* 本年度は懇親会はありません。

日本ジョージ・エリオット協会

(The George Eliot Fellowship of Japan)

〒769-2193 香川県さぬき市志度 1314-1

徳島文理大学香川校 中島正太研究室内

TEL: 087-899-7152 (直通)

E-mail: georgeeliot.japan@gmail.com

Homepage: <http://www.g-eliot.com>

研究発表要旨

出会わない二人—『ミドルマーチ』におけるメアリとドロシアの問題—

中西 温子（徳島文理大学大学院）

『ミドルマーチ』の女性キャラクターといえば、ドロシア・ブルックやロザモンド・ヴィンシーを思い浮かべる人が多いかもしれないが、メアリ・ガースも埋もれてしまうには惜しいキャラクターではないだろうか。兄弟の世話や、親戚の介護、そしてフレッド・ヴィンシーとの恋愛における葛藤といった苦労を経て幸せな結婚をするという彼女の人生は『ミドルマーチ』の中で完全に一つのプロットとなっている。にもかかわらず、メアリについての研究は他のキャラクターと比較すると、それほど多くは行われていないのが現状である。

今回の発表ではドロシアと比較することによって、メアリという人物について考察したい。とりわけ注目したいのは、様々な人間が交差することによって『ミドルマーチ』という物語が展開していく中、中心人物的な要素をもつドロシアとメアリが、物語の最初から最後まで出会うことはない、という点だ。ここには作者エリオットの何らかの意図が込められているのではないだろうか。本発表では物語の構成や二人の比較並びに分析を踏まえた上で、メアリとドロシアが出会わない理由を考察し、『ミドルマーチ』におけるメアリの物語について、再検証を試みたい。

ロザモンドがリドゲイトに幸福をもたらした可能性

——シンパシーに乏しい登場人物の功績の再評価

石井 昌子（同志社大学嘱託講師）

ロザモンドはシンパシーに乏しく、夫の研究に全く興味を示さない。そのためリドゲイトは、研究を諦めて金持ち相手の医者になる。大方の先行研究は、彼女との結婚がリドゲイトの研究を挫折させたときみなしている。他方、リドゲイトの研究の挫折の原因は、時期尚早さにあると考える批評家もいる。しかし、時期尚早であることの根拠となる当時の医学の状況の説明は、どの論文でも省略されている。またロザモンドとの結婚のポジティブな側面はこれまで言及されたことがない。

本発表はまず、リドゲイトの研究の成功の可能性は、テキストの記述と当時の医学の状況に鑑みて低いことを確認する。次に、リドゲイトの「俗っぽさ」、ロザモンドやミドルマーチの人々の反感を買う「傲慢さ」に注目する。するとリドゲイトがミドルマーチから撤退したのは、彼の研究や医療の時期尚早さ、および彼の性格による必然であると思えてくる。そして実りのない研究と感謝されない医療に替わって、ロザモンドの望む通り、都会で医者としての名声と富を得たことは、彼の高いプライドを満たしたかもしれない。ロザモンドとの結婚は、情愛深いリドゲイトの人生を、単なる「失敗」から救ったかもしれないのである。

シンポジウム要旨

題目：「響き合う作品世界—G.エリオットと 20 世紀、21 世紀の作家たち (V. Woolf, E. Bowen, A. S. Byatt, & A. Soueif)」

司会 窪田憲子（都留文科大学名誉教授）

イギリスの女性作家たちは、過去の女性作家とのつながりを意識して自分の文学を創り上げる傾向が強い。それは、V.ウルフが述べるように、「女性だったら、自分たちの母親を通して過去を考え」、文学の伝統を培ってきたからでもあろう。では、20 世紀、そして 21 世紀の作家たちは、過去の作家、とくに G.エリオットについて、どのような関わりを持っているのだろうか。本シンポジウムにおいては、20 世紀の女性作家から、V.ウルフ、E.ボウエン、A.S.バイアットを、21 世紀の作家として、A.スウェイフを取り上げ、これらの作家たちとエリオットの文学世界がどのように響きあうのか考察する。

G.エリオット『ダニエル・デロンダ』と V.ウルフ『幕間』にみる「個」と「集合体」の関係

講師 木下 未果子（神奈川大学非常勤講師）

ジョージ・エリオットとヴァージニア・ウルフはそれぞれ最後の長編小説において、“separateness and communication”(*Daniel Deronda*)、”unity and dispersity”(*Between the Acts*) というキーワードを用いて、奇しくも共通するテーマを示唆する。個々人がいかにして「個」としての自律を保ちつつ、同時に自らを取り囲む周囲の「集合体」と融合し得るのか、さらにその先にどのような新しい人間社会の可能性が開かれるのか。本発表では、ユダヤ人デロンダと、出自不明の劇作家ラ・トローブ、というイギリス社会の周縁に身を置くアウトサイダーを物語の中心に据えたエリオットとウルフの意図に注目しつつ、二作家が提示する問題意識とそれに対する応答の近似性を検証する。イギリス社会の様相が多様化するヴィクトリア朝後期にあって人々の価値観や自己認識の変化を敏感に捉え異なる「個」が共存する新しい社会の在り様を探るエリオット。第二次世界大戦勃発を目前にした状況下で不安と孤立感に心を塞ぐ人々を孤立から解放し対立でなくつながりへの道を模索するウルフ。二作家の作品の背後にみられる響き合いを探りたい。

使用予定主要文献

Eliot, George. *Daniel Deronda*. 1876. Penguin, 2003.

——. “The Modern Hep! Hep! Hep!” *The Writings of George Eliot: Impressions of Theophrastus Such*. AMS Press, 1970, pp. 235-65.

Linett, Maren Tova. *Modernism, Feminism, and Jewishness*. Cambridge UP, 2007.

Parrinder, Patrick. *Nation & Novel: The English Novel from Its Origins to the Present Day*. Oxford UP, 2008.

Ragussis, Michael. *Figures of Conversion: The Jewish Question & English National Identity*. Duke UP, 1995.

Reus, Anne. *Virginia Woolf and Nineteenth-Century Women Writers: Victorian Legacies and Literary Afterlives*. Edinburgh UP, 2022.

Woolf, Virginia. *Between the Acts*. 1941. Oxford UP, 2000.

——. *A Room of One's Own and Three Guineas*. 1929, 1938. Oxford UP, 2000.

——. *Moments of Being*. Edited by Jeanne Schulkind. Pimlico, 2002.

**E.ボウエンの後期作品（『心の死』、『エヴァ・トラウト』）における感情描写——
G.エリオットの後期作品（『ミドルマーチ』、『ダニエル・デロンダ』）との関連において
講師 伊藤 節（東京家政大学名誉教授）**

保守的リアリズム作家とみなされてきたエリザベス・ボウエンの再評価に火をつけたのは、Andrew Bennet らの『エリザベス・ボウエンと小説の解体』（1995）である。著者はモダニズム、ポストモダニズムの概念を包括するボウエンの世界に小説解体のプロセスを読み取り、かつ G.エリオットをボウエンと結びつけるリンクはウルフだとの興味深い指摘をしている。印象主義的手法を駆使するモダニスト作家ウルフを超える新しさをボウエン文学は示しているということであるが、それは感情（情動）と関わっている。ボウエンの感情表現を G.エリオットとの関連で論じる本発表では現在目を見張るような関心の高まりを示す「感情史」を視野に入れ、特にその鍵概念である「透過性のある身体」や「個の身体を超えて拡張する意識や感情」に注目する。

ここで取り上げるのはボウエンの特色が濃厚にあらわれてくる後期の作品、中でも *Eva Trout, or Changing Scenes* であり、その奇妙な物語構造と人物の感情描写に焦点を当てる。言語が未発達なエヴァ（起源の女）は時間感覚がなく、経験はすべて自分を通過する「移ろいゆく光景（副題の Changing scene）」である。幼くして母を失ったエヴァの生はひたすら母との身体的「接触」を求める旅ともいえる。「自我」が育っていないエヴァの現象としての感情は emotion というより、より強度を増した affect とも解釈できるもので、作品は伝統的リアリズムの文学空間をはるかに超えるものとなっている。同じくリアリズムに異を唱えたウルフも過去の思い出に飛び込む人物の「忘我状態」の感情を描いている。同様にエリオットの *Middlemarch* のラストにおいても愛という感情は、ドロシア（主体）が感じるというより、その身体が生み出すものとして表現される。

注目したいのは、こうした一連の感情表現の変遷が近代小説の基盤であり、物語装置としてのリアリズムに起きている変化と連動していることである。「内面の感情＝個人」という図式の解体、いわゆる「情動的転換」は、エリオットにすでにその現象の萌芽が現れ、ボウエンはその極致を小説化しているのではないだろうか。また *Eva Trout* においては『感情教育』が言及されるが、リアリズム文学の泰斗たるフローベル（G.エリオットのそれと一致する時代を生きた）の作品と本作の関係はいったい何なのか。こうした問題を含めながらボウエン、エリオットそれぞれの後期の作品を取りあげその感情表現（の変化）をリアリズムの解体という観点から考えてみる。

使用予定主要文献

- Beer, Gillian. *Darwin's Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction*. Routledge, 1983.
- Bennet, Andrew and Nicholas Royle. *Elizabeth Bowen and the Dissolution of the Novel*. St. Martin's Press, 1995.
- Bowen, Elizabeth. *The Death of the Heart*. Anchor, 2000.
- . *Eva Trout, or Changing Scenes*. Vintage, 1999.
- Corcoran, Neil. *Elizabeth Bowen: The Enforced Return*. Oxford UP, 2008.
- Eliot, George. *Daniel Deronda*. Oxford UP, 1984.
- . *Middlemarch*. Penguin, 1994.
- Hillman, David and Ulrika Maude, editors, *The Cambridge Companion to the Body in Literature*. Cambridge UP, 2015.
- Pawlikowska, Kamila. *Anti-Portraits: Poetics of the Face in Modern English, Polish and Russian Literature (1835-1965)*. Brill Rodopi, 2015.
- Raines, Melissa Anne. *George Eliot's Grammar of Being*. Anthem Press, 2011.
- Rosenwein, Barbara H. and Riccardo Cristiani. *What is the History of Emotions?* Polity Press, 2018.『感情史とは何か』伊東剛史・森田直子・小田原琳・館葉月共訳、岩波書店、2021年。
- Ryan, Vanessa L. *Thinking without Thinking in the Victorian Novel*. Johns Hopkins UP, 2012.
- 遠藤不比人『情動とモダニティ 英米文学/精神分析/批評理論』彩流社、2017年。
- フローベール、ギュスターヴ『感情教育』（上、下）太田浩一訳、光文社、2014年。

G.エリオット『ロモラ』とA.S.バイアット『抱擁』に見る歴史認識

講師 窪田 憲子（都留文科大学名誉教授）

現代のイギリス作家の中では、A.S.バイアットはもっとも G.エリオットに近い作家の一人ではないだろうか。バイアット自身、「私がもっとも好きな作家はマルセル・ブルーストで、その次は、バルザック、ディケンズ、エリオット、トマス・マン・・・」と述べているし、子どもの時からエリオットをどう受け止めてきたか、という興味深いエッセイも書いている。

本発表では、両作家の historical romance（ルネサンス時代のフィレンツェを舞台にした G. エリオットの『ロモラ』と、現代とヴィクトリア朝の両方に時代を設定したバイアットの『抱擁』）を取り上げる。バイアットが称賛するエリオットのヨーロッパ的思考や、両作家に共通する関心事である歴史認識を探ってみたい。

使用予定主要文献

- Byatt, A.S. *Passions of the Mind: Selected Writings*. Turtle Bay Books, 1992.
- , *Possession: A Romance*. Chatto & Windus, 1990.
- Eliot, George. *Romola*. 1863. AMS Press, 1970.

- Kelly, Kathleen Coyne. *A.S. Byatt*. Twayne's English Authors Series, 2. Twayne Pub, 1996.
- Levine, Caroline and Mark W. Turner, editors. *From Author to Text : Re-Reading George Eliot's* Romola. Ashgate, 1998.
- Newton, K. M. *Modernizing George Eliot : the Writer as Artist, Intellectual, Proto-Modernist, Cultural Critic*. Bloomsbury Academic, 2016.
- Thompson, Andrew. *George Eliot and Italy : Literary, Cultural and Political Influences from Dante to the Risorgimento*. Macmillan, 1998.
- Todd, Richard. *A.S. Byatt*. Northcote House Publishers, 1997.

現代エジプトにおける G.エリオット作品の継承と書き直し——A.スウェイフの

In the Eye of the Sun を中心にして

講師 濱 奈々恵（北九州市立大学准教授）

本発表では、ポストコロニアルの時代における G.エリオットの受容を確認するべく、エジプトとイギリスに文化的なルーツを持つ A.スウェイフに注目する。スウェイフが誕生した 1950 年は、エジプト内で反英感情が高まりつつある時代だったが、彼女は常に英文学、特にエリオットと共に生き、折に触れてエリオット作品と自分（あるいは主人公）を重ねている。だがその重ね方は必ずしもイギリスに憧れ、理想化するやり方ばかりではなく、F.R.リーヴィスの学徒たちが目指した「イギリス礼賛」とは異なる特徴が確認できる。E.サイドや現代イギリスで評価されるスウェイフがいかにエリオットの影響を受け、それを時代・地域を越えて継承しているかを考察する。

使用予定主要文献

- Eliot, George. *Middlemarch*. Edited by David Carroll, Oxford UP, 1998.
- . *The Mill on the Floss*. Edited by Dinah Birch, Oxford UP, 1998.
- Lovesey, Oliver. *Postcolonial George Eliot*. Palgrave Macmillan, 2017.
- Soueif, Ahdaf. "1964." *Aisha*, Bloomsbury Publishing PLC, 1996.
- . *In the Eye of the Sun*. Bloomsbury Publishing PLC, 1995.
- . *The Map of Love*. Bloomsbury Publishing PLC, 1999.
- . "Novels and Their Relationship with Current Affairs." *YouTube*, uploaded by worldwritersconf, 22 Aug. 2012, www.youtube.com/watch?v=X3vDbXwLg7g.

特別講演要旨

演題：「環境文学としてのジョージ・エリオット作品—風景、家屋、社会」

原田範行（慶應義塾大学教授）

ジョージ・エリオット作品の魅力の一つは、風景と情景が、歴史と現在が、家屋の細部と社会的動向が、あるいはまた人物の行動規範と微妙な心理の襞が、有機的に結びついて圧倒的な迫力を有しているという点にある。そのいずれもが他から切り離されては成り立ちえず、それゆえ、何気ない日常風景が多義的に人物や社会の脈動を映し出し、また個々の人物の行動には理念や思想、常識などとともに特異な情念や感性が分かちがたく結びついている。自然と人間、細部と全体、個と普遍とのこうしたダイナミックな往還とその統合的な描写をかりに環境文学と呼び、そうした環境文学をイギリス小説史においても稀に見る形で見事に実現しえた作家としてエリオットを捉えつつ、彼女の作品の文学的特徴を考察してみようとするのが、本講演の目標である。彼女の作品における身体性、感受性、思想と倫理観、リアリズムやシンボリズムの特質といった項目を設定して描写の細部を具体的に分析しつつ、彼女が有した読者への意識と読者の側のエリオット作品への反応についても検討を加え、文学史的（再）評価にも踏み込んだ議論をすることができればと考えている。

参考文献：ジョージ・エリオット作品のほか、以下5点を参考文献とします。

Bate, Jonathan. *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition*. 1991; Routledge, 2013.

Christman, Sophie D. "The Rise of Proto-Environmentalism in George Eliot". *Dickens Studies Annual* 50.1 (2019): 81-105.

MacDuffie, Allen. *Victorian Literature, Energy, and the Ecological Imagination*. Cambridge UP, 2014.

Mazzeno, Laurence W. *Victorian Writers and the Environment: Ecological Perspectives*. Taylor and Francis, 2016.

Roth, Christine. "Introduction: The Green Nineteenth Century". *Nineteenth-Century Studies* 24 (2010): 95-100.

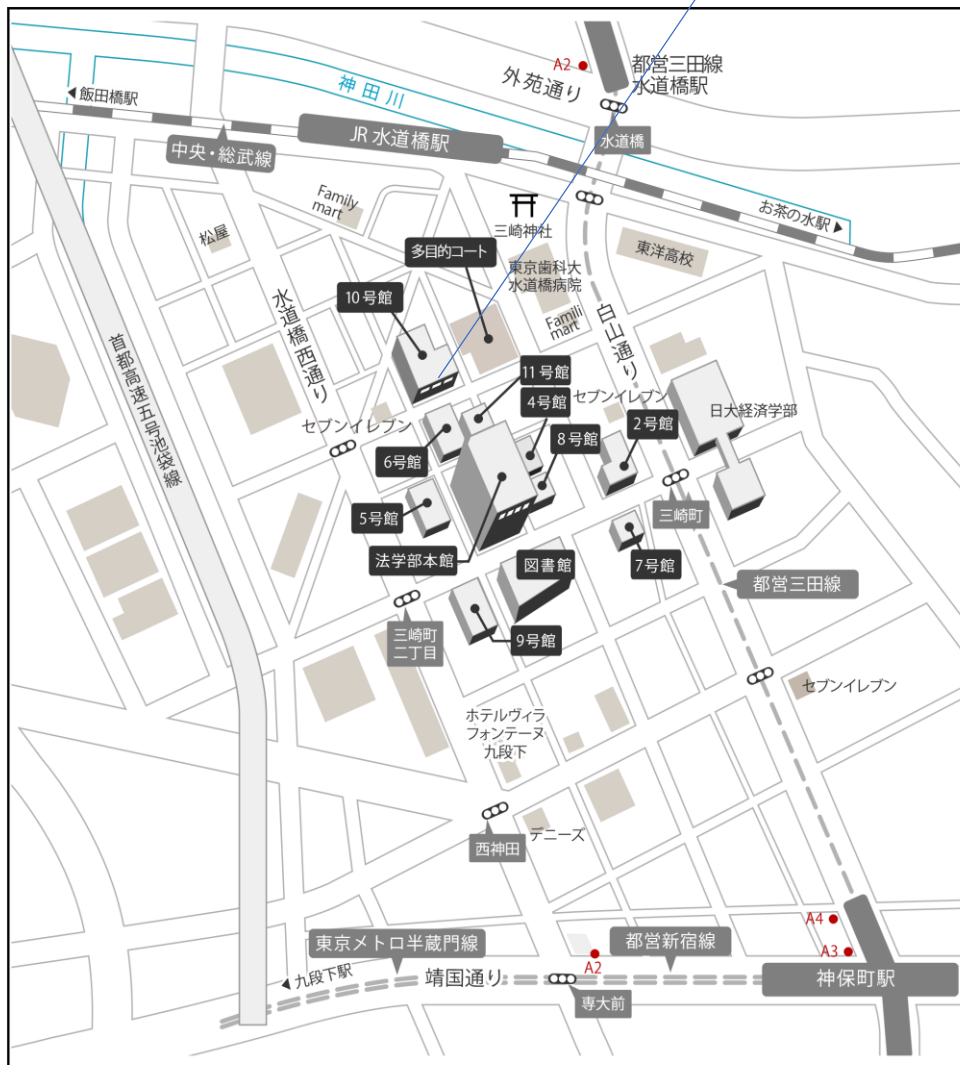
学会にご参加いただくにあたってのお願い事項

- 会員の方は大会参加費 500 円（学生を除く非会員は 1000 円）をお支払いいただくことになります。お釣りがないようにお願い致します。
- 10 号館の入り口で検温と手指消毒をお願いしておりますので、ご協力ください。
- 不織布マスクの常時正しいご着用をお願い致します。
- お加減の悪い方はご無理をなさませんようお願い致します。
- コロナ感染対策のため今年度は懇親会を行いません。また控室（1042 講堂）には茶菓の用意はございませんが、同じフロアに自動販売機がございますのでご利用ください。
- 学食は営業しておりますが会場から離れていますので、昼食は各自でご用意なさることをお勧め致します。

会場・アクセス地図

日本大学法学部案内図

10 号館



住所 東京都千代田区三崎町 2 丁目 12 番 1 号

交通・JR 総武線・中央線「水道橋」駅下車 徒歩 3～4 分

・都営地下鉄三田線「水道橋」駅下車 徒歩 3～4 分

・都営地下鉄新宿線・三田線、東京メトロ半蔵門線「神保町」駅下車 徒歩 5 分